

卷頭言

AI 時代の経営と学びの未来

学長 蟹瀬 誠一

経営は、常に時代の要請に応じて進化してきた人類の営みである。産業革命がもたらした大量生産時代、経営の中心は「効率化」だった。米経営学者フレデリック・ティラーの科学的管理法や自動車王ヘンリー・フォードのライン生産方式が注目された。

20世紀後半になると、目を見張る情報技術の発展によって経営は「情報の活用」へと軸足を移し、グローバリゼーションとともにマイケル・ポーターの競争戦略論が隆盛を極めた。そして今、AIによる変革は、単なる技術革新に留まらず、経営の本質そのものを問い直している。

AI 時代の特徴は、意思決定のスピードと精度の飛躍的向上にある。過去の経営は「人間が情報を集め、分析し、判断する」プロセスを前提としていた。しかし進歩した AI は、膨大なデータを瞬時に解析し、予測や最適化を自律的に行う。

ここで問われるのは経営者の役割である。AI が合理性を極める一方で、企業は社会的存在として新たな「価値」を創造し続けなければならない。経営者は、数値では測れない倫理、文化、価値観、ビジョンなどを示す存在として、より高度な判断力と哲学を求められる。

歴史を振り返れば、技術革新のたびに経営は「人間の役割」を再定義してきた。蒸気機関は肉体労働を機械に置き換えた。しかし新たな多くの知的労働者を生み出した。IT は知的労働を効率化した。AI はさらに意思決定の領域にまで踏み込み、これまでにないスケールとスピードで知的労働者から仕事を奪うのか、はたまた新たな職業を生み出すのかは議論の分かれるところだ。

ここで大切なのは「人間中心の経営」を忘れないことである。AI は手段であり、目的ではない。私たちの運命は私たちが決めるのであり、どんな技術革新が起きてもそれは変わらない。

企業の存在意義は、社会に価値を提供し、人々の幸福に寄与することにある。この原点を見失えば、AI 活用は単なる効率化競争に陥り、企業の存在意義も失われるだろう。

では、AI 時代の経営に必要な視座とは何か。まず「データ倫理」がある。AI の判断はデータに依存するが、そのデータが偏っていれば結果も歪なものになる。時代がすでに情報時代からフェイクニュースが溢れるニセ情報時代に移行していることをみれば明らかだ。経営者は常に透明性と公平性を担保し、社会的信頼を築く責任がある。

次に「創造性の再定義」だ。AI が膨大な既存の情報を学習する一方で、人間は新たな道を切り拓く「ひらめき」や「発見」という能力を持っている。AI 時代の経営は技術と人間性のバランスを問う挑戦である。

さらに「レジリエンス」も必要だ。予測不能が環境変化に対し、AI のモデルは過去データにしか基づけないが、人間は直感と価値観で未来を描くことができる。この柔軟性こそが、AI 時代においても人類の競争優位を決定づける。

こうした変化の中で、大学院の教育の使命はかつてないほど重要だ。AI が知識の獲得や分析を代替する時代に、人間が磨くべきは「探求心」と「価値を創造する力」である。経営者やリーダーを志す者は、AI を使いこなすスキルだけでなく、AI では代替できない判断力、共感力、そして未来を構

巻頭言

想する創造力を育むことが求められる。

大学院は、その点で「学び続ける力」を涵養する場である。AI時代の経営は、単なる効率化ではなく、人間の創造性と倫理を基盤とした持続可能な価値創造を目指す。その為に、大学院は理論と実践を架橋し、異分野の知を結集し、未来社会に貢献するリーダーを育成する使命を担っている。AIがもたらす変革を恐れるのではなく共に進化するための知的基盤を築くこと、それがAI時代の大学院大学に課せられた最大の責務である。